

## 馬瀬狂言資料の紹介(10)

——「鳶磔」について——

はじめに

馬瀬狂言に伝わる「鳶磔」<sup>1</sup>の台本は、文化二年(二八〇五)正月吉日の年記を有するもの(中屋豊和七ノ三、<sup>2</sup>以下「馬瀬文化二年本」とする)と、特に年記の記されていないもの(中北小すゑ一、以下「馬瀬中北本」とする)の二本である。この中の馬瀬文化二年本は、諸流に認められない独自の展開があること、また本曲は現行の上演台本にも収められていることから、馬瀬狂言の芸態や伝承のあり方について考察するのに有益な資料と考える。加えて馬瀬文化二年本は、馬瀬狂言資料の中で確認できる最も古い年記の資料であるため、江戸後期からの変遷をたどる上でも適したものと言える。そこで本稿では上記の各台本の内容を紹介し、馬瀬狂言の芸が現在に至るまでにどのように受け継がれているのかを把握し、その伝承の一端を明らかにする。

### 一、馬瀬文化二年本「鳶磔」

#### (1) 書誌

袋綴。半紙本(縦二四・二×横一七・三糎)。墨付六三丁。片面八〜一四

山 本 晶 子

行(曲によって異なり、平均二一行)。濃茶色表紙。表紙には「狂言六義 一 末廣／二 鞍馬参／三 井杭／四 鼻取相撲／五 木六駄／六 因幡堂／七 胸突／八 千歳／九 煎物／十 鳶磔／十一 三人長者／十二 三人夫／十三 佐渡狐／十四 枕物狂／十五 今神明／十六 木実論／十七 三人片輪／十八 飛越／十九 比丘貞」とある(写真1参照)。冊子の最終丁に「文化二年正月吉日 狂言六義 度会郡馬瀬村 林直右衛門主」と記され、裏表紙にも、林直右衛門の署名がある。また裏表紙の見返部分に「馬瀬 林甚内什物／文化二年十一月／千秋万歳／子孫長久／富貴繁盛／家内安全」とある。「文化二年正月吉日」という年記があることから、馬瀬狂言の台本に多く認められるように、馬瀬神社の例大祭(正月二十日に実施)のための台本であると考えられる。この「林直右衛門」という名前は馬瀬狂言の上演資料<sup>3</sup>では確認できないが、「甚内」については、江戸末期から大正期までの番組がまとめられている「狂言番組扣」の安政五年(二八五八)の大泉寺での番組に出演していることが確認された。この記事では姓が記載されていないため、同一人物である確証はないが、可能性の一つとして指摘しておきたい。

所収曲は、表紙に記された通り、全一九曲で、和泉流系統のものと言える。この中の「枕物狂」が明和中根本の詞章と一致していることについて

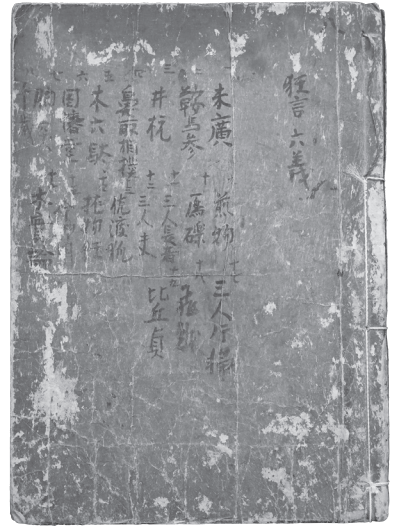


写真1 馬瀬文化二年本表紙

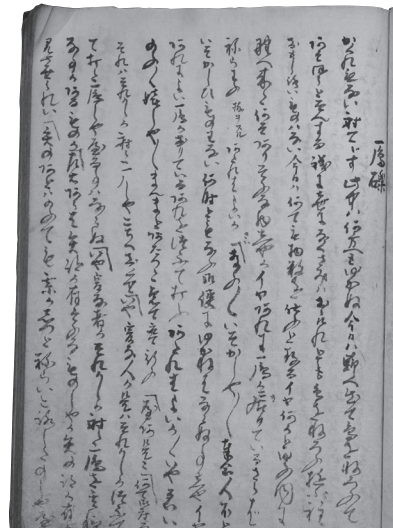


写真2 馬瀬文化二年本「鴈磔」

## (2) 曲の展開

「鴈磔」の展開を各場面毎にまとめたのが表1である。馬瀬文化二年本と馬瀬中北本の展開を主に、和泉流諸本との相違を小段毎に明示した。

なお、登場人物の役名については、諸本で違いがあるが、シテを射手、アドを通行人・仲裁人に統一した。

は報告済みであるが、その後の調査で他にも明和中根本と一致する曲〔比丘貞〕が認められた。その一方で、詞章がかなり簡略化されている曲〔鼻取相撲〕などもあり、曲によって和泉流諸本との関係性が異なる台本であることが推測される。

本稿で取り上げる「鴈磔」(写真2参照)については、結論から言えば、曲の前半と終曲部は和泉流山脇派の詞章と共通するものが多いが、曲の後半、仲裁人が説得し、再度射手が鴈を射るまでの場面が、諸流にない独自の展開を有している。そこでまず本曲の展開について、近い関係にあると考えられる和泉流山脇派の明和中根本・和泉流秘書・古典文庫本、更に狂言大全集<sup>5</sup>と比較を行い、特徴的な展開や詞章からその関係性を確認することとする。

(原文を引用する場合の台本名は以下の通り、略称を使用する。馬瀬文化二年本文、馬瀬中北本…中、明和中根本…明、和泉流秘書…秘、古典文庫本…古、狂言大全集…全)

表1 馬瀬狂言「鴈磔」の展開 (凡例)

- ・馬瀬文化二年本と馬瀬中北本の展開を小段に分け、和泉流諸本との相違を示したものである。
  - ・馬瀬文化二年本と馬瀬中北本の小段の内容を項目毎に丸数字を付した。いずれかの台本にない場合は、ナシとした。
  - ・〔和泉流諸本との相違点〕は、詞章の細かな表現の差異は原則として取り上げることとはしないが、特徴的な表現と思われる語は\*印を付して示した。
  - ・〔和泉流諸本との相違点〕に付した記号は下記の通りである。
  - ◎…馬瀬文化二年本と馬瀬中北本のいずれの本の内容とも共通する
  - …馬瀬文化二年本の内容と共通する
  - …馬瀬中北本の内容と共通する
  - ×…いずれの台本とも共通しない
  - +…和泉流諸本の展開が馬瀬狂言台本と共通しながらも、内容が一部加わっている
- なお、各本の書名は、先に掲げた略称を用いる。

表1 馬瀬狂言「鷹磔」の展開

|     | 内容                                    | 馬瀬文化二年本  | 馬瀬中北小すゑ本   | 和泉流諸本との相違点   |
|-----|---------------------------------------|--|--|--|
| 場面1 | A 射手（シテ）の登場                           | ①射手<br>②この間は何方へもゆかない<br>③野へ出て鳥を狙って遊ぶ   | ①射手<br>②この間は何方へもゆかない<br>③野へ出て鳥を狙って遊ぶ   | ①◎【明・秘・古】<br>×大名【全】<br>②◎【明・秘・古】<br>×ナシ【全】<br>③◎【明・秘・古・全】  |
|     | B 道行                                  | ①世の中の慰みで、鳥を狙って遊ぶ程面白いものはない<br>②今日は物数を射よう<br>③野に到着する   | ①世の中の慰みで、鳥を狙って遊ぶ程面白いものはない<br>②ナシ<br>③野に到着する  | ①◎【明・秘・古・全】<br>②○【明・秘・古・全】<br>③◎【明・秘・古・全】  |
| 場面2 | 射手が鷹を狙う                               | ①何かいそうだが<br>②鷹がいる<br>③鷹を狙おう<br>④射るための身寄せをする  | ①何かいそうだが<br>②鷹がいる<br>*見事な鷹<br>③鷹を狙おう<br>④射るための身寄せをする   | ①×ナシ【明・秘・古・全】<br>+よい気色【秘・古】<br>+いつも鷹がいるが、今日は見えない【明・秘・古・全】<br>②◎【明・秘・古・全】<br>*●大きな鷹【明・古】<br>③◎【明・秘・古・全】<br>④◎【明・秘・古・全】  |
| 場面3 | 通行人（アド）の登場、鷹を見付けて磔を投げる                | ①忙しいことだ<br>②奉公人程忙しいものはない<br>③a いつでも使いに行かなければならない<br>④鷹がいる<br>⑤磔で打とう（磔を打つ）<br>⑥うまく当たったので、取って行こう<br>⑦ナシ  | ①忙しいことだ<br>②ナシ<br>③b 急用があって、山の向こうへ行く<br>④鷹がいる<br>⑤磔で打とう（磔を打つ）<br>⑥うまく当たったので、取って行こう<br>⑦射手は今迄いた鷹が見えなくなり不審がる   | ①◎【明・古・全】<br>×ナシ【秘】<br>②○【秘・古】<br>●ナシ【明・全】<br>③a ○【秘】<br>③b ●【明※・古・全】<br>※明…山の向こうナシ<br>④◎【明・秘・古・全】<br>+何とかあれを才覚したい【古】<br>⑤◎【明・秘・古・全】<br>+この間も轆を仕留めた【古】<br>⑥◎【明・秘・古・全】<br>⑦●【秘・古・全】<br>○ナシ【明】                       |
| 場面4 | 射手と通行人の鷹を巡る問答                         | ①射手が通行人を呼び留め、鷹を取って行くことを咎める<br>②通行人は自分が磔で打った鷹であると主張する<br>③射手は自分が射たものと譲らない<br>④通行人は矢の跡がありそうなものだと言質す<br>⑤射手は狙い殺したと主張する<br>⑥通行人は無理なことを言うものと非難する<br>⑦射手は通行人を脅す<br>⑧通行人は相手にしない<br>⑨射手は再度脅し、とうとう弓矢を構える<br>*ナシ<br>⑩通行人は助けを呼ぶ | ①射手が通行人を呼び留め、鷹を取って行くことを咎める<br>②通行人は自分が磔で打った鷹であると主張する<br>③射手は自分が射たものと譲らない<br>④ナシ<br>⑤ナシ<br>⑥通行人は無理なことを言うものと非難する<br>⑦射手は通行人を脅す<br>⑧通行人は相手にしない<br>⑨射手は再度脅し、とうとう弓矢を構える<br>*「己に物を言わせておくに依てじや」<br>⑩通行人は助けを呼ぶ | ①◎【明・秘・古・全】<br>②◎【明・秘・古・全】<br>③◎【明・秘・古・全】<br>④○【秘】<br>●ナシ【明・古・全】<br>⑤●ナシ【明・秘・古・全】<br>⑥◎【明・秘・古・全】<br>⑦◎【明・秘・古・全】<br>⑧◎【明・秘・古・全】<br>⑨◎【明・秘・古・全】<br>*●「己に物を言わせておくに依てじや」【全】<br>*「物を言わせておけば方量もない」【明・秘・古】<br>⑩◎【明・秘・古・全】 |
| 場面5 | A 仲裁人（アド）の登場、射手から事情を聞く                | ①仲裁人は射手に声をかけ、事情を尋ねる<br>②射手は自分の獲物の鷹を渡さない通行人を射ようとする<br>③仲裁人は自分がいるから、聊爾はさせない<br>④自分が通行人を説得すると言う<br>*ナシ<br>⑤射手は早く鷹を渡せと言う   | ①仲裁人は射手に声をかけ、事情を尋ねる<br>②射手は自分の獲物の鷹を渡さない通行人を射ようとする<br>③仲裁人は自分がいるから、聊爾はさせない<br>④自分が通行人を説得すると言う<br>*「よいように言い付ける」<br>⑤射手は早く鷹を渡せと言う   | ①◎【明・秘・古・全】<br>+射手は仲裁人のことを尋ね、目代と名乗る【秘・古】<br>②◎【明・秘・古・全】<br>③◎【秘・全】<br>×ナシ【明・古】<br>④◎【明・秘・古・全】<br>*●「よいように言い付ける」【全】<br>*×「急度言い付ける」【明・古】<br>⑤◎【明・秘・古・全】  |
|     | B 仲裁人は通行人から事情を聞く                      | ①ナシ<br>②ナシ   | ①仲裁人は通行人に事情を聞く<br>②通行人は自分の磔で仕留めた鷹だと話す  | ①●【明・古・全】<br>○ナシ【秘】<br>+通行人は仲裁人の登場を喜ぶ【明・古・全】<br>②●【明・古・全】<br>○ナシ【秘】<br>+鷹を仕留めた経緯を話す【明・古・全】<br>+仲裁人が通行人の説明に理解を示す【古・全】   |
|     | C 仲裁人は射手に対して、通行人から聞いた話を説明するが、射手は納得しない | ①ナシ<br>②ナシ   | ①仲裁人は射手に事情を説明する<br>②射手は納得せず、再度鷹を要求する   | ①●【明・古・全】<br>○ナシ【秘】<br>②●【明・古・全】<br>○ナシ【秘】<br>+磔で仕留められるわけがないと反論【明・古】   |
|     | D 通行人は仲裁人に対して、鷹に矢の跡がないことを話す           | ①仲裁人は射手の話を通行人に伝える<br>②通行人は射手の主張に無理があると言う<br>③射止めた鷹なら、矢の跡がありそうなものだと言質する<br>④矢の跡はないと指摘する<br>⑤だから射手には鷹は渡さないと言う<br>⑥仲裁人も納得する   | ①仲裁人は射手の話を通行人に伝える<br>②通行人は射手の主張に無理があるという<br>③射止めた鷹なら、矢の跡がありそうなものだと言質する<br>④矢の跡はないと指摘する<br>⑤ナシ<br>⑥仲裁人も納得する   | ①◎【明・秘・古・全】<br>②◎【明】<br>×ナシ【秘・古・全】<br>③◎【明・秘・古・全】<br>④◎【明・秘・古・全】<br>⑤●ナシ【明・秘・古・全】<br>⑥◎【明・秘・古・全】   |

|      | 内容   | 馬瀬文化二年本   | 馬瀬中北小すゑ本   | 和泉流諸本との相違点  |
|------|--|---|--|---|
| 場面6  | 射手は鷹を狙い殺したと主張する  | ①仲裁人は矢の跡がないことを告げる<br>②だから鷹は渡さない<br>③射手は鷹を狙い殺したので、矢の跡はない<br>④仲裁人は射手の話を取り合わない<br>⑤仲裁人は思案する<br>⑥ナシ<br><br>⑦ナシ<br>⑧ナシ   | ①仲裁人は矢の跡がないことを告げる<br>②ナシ<br>③射手は鷹を狙い殺したので、矢の跡はない<br>④仲裁人は射手の話を取り合わない<br>⑤ナシ<br>⑥射手は仲裁人では埒が明かないので、通行人に対して再度脅そうとする<br>⑦仲裁人は射手を止める<br>⑧仲裁人は自分で通行人に話をつけるので、射手に待つように言い、射手も納得する  | ①○【明・秘・古・全】<br>②●ナシ【明・秘・古・全】<br>③○【明・秘・古・全】<br>④○【明・秘・古・全】<br>⑤●ナシ【明・秘・古・全】<br>⑥●【明・秘・古・全】<br><br>⑦●【明・秘・古・全】<br>⑧○ナシ【明・秘・古・全】                                  |
| 場面7  | 仲裁人の説得 A<br>i<br>通行人に対して再度射手に鷹を射させることを提案し、通行人も納得する<br><br>ii<br>射手に対して再度鷹を射ることを提案し、射手も渋々承知する   |   | i<br>①仲裁人は通行人に対して、再度射手に鷹を射させる提案をする<br>*「勝負にせよ」<br>②通行人はすでに仕留めた鷹に矢を当てられないことはないと言論する<br>③仲裁人は射手はたいそう下手そうだと説得<br>④通行人は納得する<br>ii<br>①仲裁人は射手に対して、再度鷹を射ることを提案する<br>②射手はすでに仕留めた鷹に矢を当てられないことはないと言論する<br>③仲裁人は射なければ負けと言ひ、射手は渋々承知して、鷹を元の所へ置くように言う | i<br>①●【明・古】<br>*×【明・古】<br>②●【明・古】<br>③●【明・古】<br>④●【明・古】<br>ii<br>①●【明・古】<br>②●【明・古】<br>+射手は再度通行人を射殺そうとする【明・古】<br>③●【明・古】                                       |
|      | 仲裁人の説得 B<br>i<br>射手に対して、再度鷹を射ることを提案し、射手も渋々承知する<br><br>ii<br>通行人に対して、再度射手に鷹を射させることを提案し、通行人も納得する |   |  | i<br>①○【秘・全】<br>②×ナシ【秘・全】<br>*○「勝負をせよ（賭けはナシ）」【全】<br>③○【秘・全】<br>+射手は再度通行人を射殺そうとして、仲裁人に押しとどめられる【秘】<br>ii<br>①○【秘・全】<br>②×ナシ【秘・全】<br>③○【秘・全】<br>④○【秘・全】<br>⑤○【秘・全】 |
| 場面8  | 射手が再度鷹を射るための準備・交渉を行う   | ①仲裁人は刀と鷹を回収する<br>②射手は矢を射る数を50本としたという希望を告げ、仲裁人に断られる。再度10本と希望するも、退けられる<br>③射手は鷹を置く場所について近くにするように言う<br>④ナシ<br>⑤ナシ<br>⑥ナシ<br><br>⑦仲裁人はその場で射るように諭すと、射手が近づいて射ようとし、再度仲裁人に注意される | ①ナシ<br>②ナシ<br><br>③射手は鷹を置く場所について近くにするように言う<br>④通行人は用事があるから射手に早く射よう、仲裁人から告げてもらおう<br>⑤射手は準備をしていると言う<br><br>⑥射手は鷹の置き場が元の所と違うと注文をつける<br>⑦仲裁人はその場で射るように諭すと、射手が近づいて射ようとし、再度仲裁人に注意される   | ①●ナシ【明・秘・古・全】<br>②●ナシ【明・秘・古・全】<br><br>③○【明・秘・古・全】<br>④○【明・秘※・古・全】<br>※秘…用事があるからナシ<br>⑤●【明・秘・古】<br>○ナシ【全】<br>⑥●【明・秘・古・全】<br>⑦○【明・秘・古・全】                          |
| 場面9  | 射手は再度鷹を射るが外し、通行人が鷹を取って行く   | ①仲裁人に射るように言われて、射手は射る<br>②仲裁人と通行人は見物する<br>③射手は外す<br>④a 見物していた両人は笑う<br>⑤再度小袖上下を賭けて射る<br>⑥射手は外す<br>⑦通行人は射外したのを見て、鷹を取って行く   | ①仲裁人に射るように言われて、射手は射る<br>②仲裁人と通行人は見物する<br>③射手は外す<br>④b 見物していた両人は笑い、下手と評する<br>⑤ナシ<br>⑥ナシ<br>⑦通行人は射外したのを見て、鷹を取って行く  | ①○【明・秘・古・全】<br>②○【明・秘・古・全】<br>③○【明・秘・古・全】<br>④●【明・古・全】<br>×ナシ【秘】<br>⑤●ナシ【明・秘・古・全】<br>⑥●ナシ【明・秘・古・全】<br>⑦○【明・秘・古・全】   |
| 場面10 | 終曲の射手と通行人との問答  | ①射手は通行人に襲羽が欲しいと頼む<br>②通行人は何に使うのか、尋ねる<br>③射手は茶掃き羽にしたいと言つて、通行人はやらないと言つて、その場を去る<br>④射手はその後を追う  | ①射手は通行人に襲羽が欲しいと頼む<br>②通行人は何に使うのか、尋ねる<br>③射手は茶掃き羽にしたいと言つて、通行人はやらないと言つて、その場を去る<br>④射手はその後を追う   | ①○【明・秘・古・全】<br>②○【明・秘・古・全】<br>③○【明・秘・古・全】<br><br>④○【明・秘・古・全】  |



表1に従い、馬瀬文化二年本の展開について考察する。

## 1 射手(シテ)の登場・道行

「隠れもない射手」が、野へ出て鳥を「ねらうて」遊ぶと名乗る。「世に慰みは多い」中で、鳥を射ることの面白さを述べながら、野へ到着する。諸本の詞章はほぼ共通しているが、狂言大全集のみシテの名乗が「大名」である(以下、シテは「射手」に統一する)。また詞章の面では左記の通り、二つの形が確認できる(傍線部は稿者による。以下同じ)。

文 今日ハ野へ出て鳥をねろふてあそはうとそんする(他に中・明・全)

秘 けふは野へ出て鳥を射て慰ふと存る(他に古)

## 2 射手が鷹を狙う

野に到着した射手は鷹を見付け、身拵えをして、狙いを定める。馬瀬文化二年本は最も簡潔な台詞となる。その一例として、身拵えをする直前までの台詞を、明和中根本と比較すると以下の通りである。

文 何そありそふな物しやか。イヤあれに鷹か居りてゐる。

明 毎も此あたりに鳥がおりて居るが、けふは見へぬ。また時分がはいいか。

但し遅かつたかしらぬ。(中略)されはこそあれに鷹がおりて居る。扱く大きな鷹しや。

他本では、「よい気色」であることや鷹の大きさなど細やかな情景描写がなされるが、馬瀬文化二年本では特に記されていない。

## 3 通行人(アド)の登場、鷹を見付けて礫を投げる

そこに、通行人が奉公する者の忙しさを口にしながら登場し、鷹を見付けて、礫を打ち仕留める。

文 奉公人ほといそかしひものわない。何時ともなふ御使にゆかねはならぬ事しや。

古 洵に奉公人程忙がしい者はない。何時ともなふか様に急なお使に参る事ぢや。

右記の通り、詞章として近いものが古典文庫本である。傍線部のような違いはあるが、ほぼ共通する台詞と言える(通行人の登場場面において、奉公人の忙しさを述べるのは、この他に和泉流秘書のみ)。但し古典文庫本では、この後に鷹を礫で打つ箇所で「此中も鴨を一羽打留た」という台詞が加わるなど、馬瀬文化二年本と全く一致しているわけではない。

## 4 射手と通行人の鷹を巡る問答

鷹を取って立ち去ろうとする通行人に射手が声をかけ、通行人は自分の仕留めた鷹であると応え、言い争いとなる展開は諸本共通する。その中で馬瀬文化二年本では、通行人が鷹に矢の跡がありそうなものだと問い質し、射手は鷹を射たのではなく狙い殺したと応えるやりとりがこの場面に含まれる(他本では場面6)。馬瀬文化二年本と同様に、矢の跡を話題としているのは和泉流秘書であるが、左記の通り射手の狙い殺したことについての言及はここにはない。

文 「左右あらは矢跡か有そふなものしやか。矢の跡か有か見させられい。「矢のあとハのふても、某かしつとねらいころしたのしや。」

秘 「其方のい留めさせられた雁成らは矢の跡か御さるふが 是見させられ私が礫で打た雁ちやニ仍て矢のあとか御座らぬ

## 5 仲裁人(アド)の登場、兩人から事情を聞く

仲裁人は、まず射手から事情を聞く。その後、通行人の話を聞き、改め

て射手に事情を説明し、再度通行人が矢の跡がないことを説明する展開となる。この場面の詞章も諸本に共通するものが多い。その中で仲裁人の設定は本によって異なり、所の目代とするのは和泉流秘書と古典文庫本のみで、その他はその場に通りがかった者として特に示さない。また馬瀬文化二年本では、通行人の話を聞き、射手に事情を説明する過程（表1 場面5のB・C）が省略され、そのまま矢の跡があるかどうかの話に移る。この展開に近いのが和泉流秘書で、馬瀬文化二年本同様に簡潔な形となる。

## 6 射手は鴈を狙い殺したと主張する

鴈に矢の跡がないと指摘する仲裁人に対して、射手は自分が狙い殺したと無理な説明をする流れは諸本共通である。この場面の詞章で馬瀬文化二年本と共通した表現が認められるのは狂言大全集である。

文 なふく／＼あれハあの者かつふて、打たと申。こなたの射とめさせられたら

は、矢の跡か有そふなもので御さるか、矢の跡ハ御座らぬ。（中略）

「某しつとねらい殺したのしや。」笑 鴈か其様にねらい殺さるゝものでハ御座らぬ。

全 ヤのふく／＼、こなたのいとめさせられた鴈ならば矢の跡か有りそふなもの

じやか、矢の跡はござらぬぞや。（中略）

「身共が弓矢を持てじつとねらいころしたいやい。笑 中／＼あの鴈のねらいころさるゝものではおりない。

傍線部の通り、細かな違いは認められるものの、詞章の内容はほぼ共通していると言える。

その後、馬瀬文化二年本以外の諸本では、埒が明かないのに業を煮やした射手が強引に決着させるため通行人を射ようとし、仲裁人に留められる

展開となるが、馬瀬文化二年本ではそのやりとりがなく（表1 場面6の⑥⑦⑧）、仲裁人が思案する場面（同⑤）となり、簡略化されている。

## 7 仲裁人の説得

この後、仲裁人は対立する二人を説得し、再度射手にすでに仕留められた鴈を射させる展開になるが、説得する順序が左記の通り、A・Bの二通りに分かれる。

A i 通行人 ii 射手 : 馬瀬中北本・明和中根本・古典文庫本

B i 射手 ii 通行人 : 馬瀬文化二年本・和泉流秘書・狂言大全集

通行人に対して、射手の弓矢の技術は下手そうだからと説得することは諸本に共通する。その中でAの馬瀬中北本・明和中根本・古典文庫本は、再度の説得に応じない射手の様子を描くことにより、射手の強硬な態度を印象づける。さらに通行人を先に説得する流れも強硬な射手を敬遠するように見える。一方の馬瀬文化二年本以下三本は、先に射手から説得する。その際、馬瀬文化二年本と狂言大全集は、射手に勝負をしてはどうかと持ちかける展開になる。

文 「夫ハ是てハ埒か明ぬ。勝負をさせられい。」夫ハ何とする。

全 「是ではすまぬ。勝負にさせられ。」して勝負には何をする。

更に馬瀬文化二年本では、射手の一腰を賭けた勝負を提案する。この両本は詞章の面でも共通性が認められる。ただ「勝負」という言葉で射手の決心を促すことについて、上記二本以外の台本には、提案をなかなか承知しない射手に対して、再度射ることをしないと「そなたの負け」と説得する仲裁人の台詞があり、射手を煽る形であることは馬瀬文化二年本等に通じていると言えよう。馬瀬文化二年本は、再度の提案を勝負と明言し、更に

賭けという要素を加えることで、その後の失敗をより際立せることを狙っていたのではないだろうか。

### 8 射手が再度鴈を射るための準備・交渉を行う

諸本では、射手が身拵えに時間をかけ、そのことを通行人から咎められる場面となる。更に、通行人が鴈を置く場所について、射手がもう少し近くにするように指示する（表1 場面8の③）など、準備にわざと時間をかける様が描かれる。その様は明和中根本では「未練」、和泉流秘書や古典文庫本では「卑怯」と評される。

一方、馬瀬文化二年本では、先の場面7から独自の展開（同①②）が続き、まず仲裁人が鴈と刀を預かり、その後射手が矢を射る数を提案し、五〇本、続いて一〇本と矢の数を提示するが、結局一本しか認められず、その後、諸本に認められる鴈を置く場所についての押し問答となる。

### 9 射手は再度鴈を射るが外し、通行人が鴈を取って行く

射手は弓を射る直前も近寄り注意を受けるが、結局射外し、その鴈を通行人が取って行く。馬瀬文化二年本では、一度外した後に、改めて小袖上下を賭けて再度射る場面（表1 場面9の⑤⑥）が加わり、諸本と大きく異なる。

### 10 終曲の射手と通行人との問答

終曲では、通行人が鴈を持って去る時に、射手は襲羽を欲しいと求めるが、通行人に断られる。諸本いずれの詞章も共通している。

### （3）独自の演出の背景

これまでの展開で示した通り、馬瀬文化二年本は、独自の場面（場面7・8・9）や、やりとり・詞章の省略などの簡略化（場面5・6）が認め

られるものの、全体的には和泉流山脇派の詞章を伝えたものと言える。その中で和泉流諸本との関係性は場面によって異なるが、共通する項目が多かったのは、和泉流秘書と狂言大全集である。和泉流秘書は、曲の前半場面5での省略などで共通性が高い。一方狂言大全集は、馬瀬文化二年本独自の展開に繋がる「勝負」という特徴的な表現が共通しており、その点で注目される。そしてこの狂言大全集との関係性の近さは、現行の上演台本と共通する馬瀬中北本でより明確になる。この馬瀬中北本については後述することとし、先に馬瀬文化二年本独自の展開とその意図について指摘しておく。

この独自の展開を改めてまとめると、以下の三点となる。

a 自分が狙い殺したと主張する射手に対して、仲裁人は一腰を賭けた勝負で決着をつけることを提案する

b 鴈を射る矢の数を一本のみと限られた射手が、五〇本、それが難しいなら一〇本と交渉する

c 鴈を射外した射手が、再度小袖上下を賭け、挑戦する

馬瀬文化二年本では、前半を簡略化し、射手がすでに仕留められた鴈を再度射るという後半に新たな展開を加えることで、無理なことを要求する射手が一度ならず二度までも射外すという、射手の失敗をより強調した描き方となる。

こうした流れは、和泉流のみならず、諸流の「鴈撃」に認められないものであるが、「鴈撃」の類曲とされる「鶯」の後半部分に共通するところがあり、それを参考にしたものと考えられる。「鶯」は、稚児の梅若殿に鶯を贈りたいと考えている男がたまたま鶯駕籠を見付け、持って行くこととする。そこに現れた持ち主に咎められた男は何か鶯を手に入れようとす

る。無理を言う男に対し、持ち主は太刀や刀を賭けた勝負を提案し、その結果、男が失敗する話である。この曲は大蔵流では上演されなかったよう  
で、和泉流を中心に、鷺流の一部などで演じられてきた。曲の後半、鷺を  
どうにかして手に入れた男が駕籠に入った鷺を狙うという展開になる。  
シテの男が動かない（駕籠の中にいる）鳥を刺したいと要求することから  
賭けとなり、その結果二度とも失敗となるこの展開は、馬瀬文化二年本の  
「鴈磔」に共通していると言えよう。馬瀬狂言の上演記録では、「鴈磔」は  
一回（明治一五年 シテ北林吉蔵）、「鷺」（明治二〇年 シテ林安松／明治四〇年  
シテ 中川利吉）は二回と、いずれも上演が認められ、両曲が馬瀬で伝承  
していたことは明らかである。

和泉流諸本の「鷺」の中で、馬瀬文化二年本に近いものを確認すると、  
左記の通り三宅派の詞章が該当するようである。狂言集成では、

アドヘイヤとかく鳥は身共の物。腰の物はそなたの。どうなりともおぬしの  
勝手に召され。シテへはて苦々しい。イヤそれならば勝負に致さう。アドヘ  
勝負とは。

と、賭けを「勝負」と説明している。また更に先のbの内容に該当するも  
のとして、和泉流狂言大成では、駕籠の中の鷺を刺す回数について、

アト「かまへて一トさしでおりあるぞや シテ「いかなく先一捨さしもさゝ  
うぞ アト「いや爰な人が、籠に入てゐる鳥を、夫程の内にさゝれぬといふ  
事があるものか、一トさしよりはならぬ シテ「夫ならば捨五さしさゝせて  
おくれあれ アト「いやならぬ シテ「夫ならば十指 アト「思ひもよらぬ事  
でおりある シテ「責て五さし

と交渉する。馬瀬文化二年本「鴈磔」ではここまで執拗に交渉することは  
ないものの、何とか射る回数を増やそうとする姿勢は共通している。この  
ように馬瀬文化二年本「鴈磔」は、和泉流三宅派の「鷺」の展開を摂取し  
て作られたものと考えられる。こうした独自の演出が馬瀬狂言内で作り出  
されたのか、他で演じられていたものを馬瀬で取り入れて演じたのかにつ  
いては未詳である。が、このことを考える手掛かりとして、馬瀬狂言の中  
には、この馬瀬文化二年本「鴈磔」と同様に、類曲の一部を摂取したと想  
定される事例が他にも指摘できる。奥野本<sup>6</sup>「牛盗人」である。「牛盗人」  
とその類曲「鶏猫」は共に、罪を犯した親を子が自ら訴え出ること、親  
の罪を許してもらうという展開の曲であるが、奥野本「牛盗人」には、他  
の和泉流山脇派の諸本と異なる箇所、すなわち類曲「鶏猫」を摂取したと  
考えられる箇所が左記の通り三点、認められる。

#### ● 1 シテの名前が刑部三郎

「牛盗人」のシテは、諸本では兵庫三郎とされるが、奥野本では刑部三  
郎となる。この刑部三郎は狂言によく登場する架空の人物名で、「鶏猫」  
のシテの名前としても用いられる。奥野本は「鶏猫」を参考にした可能性  
が高い。但し、明和中根本「牛盗人」では、シテの役名を「兵部三郎」と  
していることから、それを参考にした、あるいは音が似ていることから聞  
き誤って使用した可能性も考えられよう。

#### ● 2 子が親の罪を訴え出るまでの経緯や心情を語る場面

子が訴人を決意するまでの経緯や心情を語る場面で、諸本の「牛盗人」  
では、「大事」があるからと語るだけであるが、奥野本「牛盗人」ではそ  
れまでの経緯も含めて語る。この奥野本の詞章に近似している「鶏猫」が、  
法政大学能楽研究所古川文庫蔵『和泉流八十番狂言本』（以下「古川八十番本」



とする。原文引用では「八」と略称を用いる）である。（和泉流山脇派諸本との違いを示すため、参考に明和中根本「牛盗人」も併せて掲げた）。

奥 夫に付、もし此事外よりもれては、親にて候ものゝ身の上、何となる事  
そとて、此二三日は食時をさへたべかねて御さる。いろ／＼と思案をい  
たし、急度分別と仕て御座る。

八 此事外よりもれ聞へたらば、親しやものハ何と成ふと存して、此二三日  
ハ食事もたへすいろ／＼と思案をいたし、急度思ひ付た事か有。

明 誠に一大事のことを訴人するハ大切なことなれとも身にこへた大望か有  
に仍てのことしや。

●3 子が訴人してから、太郎冠者・次郎冠者が三郎を捕らえに行く場面  
諸本では二人が三郎を捕らえる方法の打ち合わせをするが、奥野本では、  
太郎冠者、次郎冠者が共に、三郎のことをそもそもよく思っていないかった  
相手であることを語り、古川八十番本も同様である。

奥 太「誠にあの刑部三郎はつね／＼うてたてをするによつて、につくい／＼  
と思ふていた。幸ひの事ぢや。二「某もきやつには意趣かある。

八 「あの刑部三郎ハ日頃腕だてをするに依て、にくし／＼とおもふたか、是  
はよひ事か出来たナア。「某もきやつには意趣かあるいやい。

明 「前略 きやつハ日比心得た者しやといふ程に、参るそかゝるそといふ  
てハとられまい。是へ呼出してたはかつて取ふと思ふか何と有ふ。

このように奥野本「牛盗人」は、シテの設定、詞章などに類曲の「鶏猫」  
を参考にしたと推測される箇所が見える。こうした曲の存在や、御木曳  
きのために「釣狐」をアレンジした独自曲「こんくわい」<sup>7</sup>を演じるといっ

た馬瀬狂言の活動状況を踏まえると、馬瀬文化二年本の「鳶磔」も、馬瀬  
狂言において類曲を用い、新たな演出を試みた可能性は充分考えられるの  
ではないだろうか。

## 二、馬瀬中北本「鳶磔」

次に馬瀬中北本の「鳶磔」について取り上げ、馬瀬文化二年本と現行の  
形との関係を明らかにする。

### （一）書誌

袋綴。半紙本（縦二四・八×横一七・三糎）。墨付三六丁。片面八／＼一二行。  
薄茶色表紙。表紙には、「膏葉煉 御冷 船ふな 鳶磔 長刀応答 朝日奈」  
とある。最終丁の裏に「林友吉」、また裏表紙にペン書きで、「中北梅雄持  
主」と署名がある。中北小すゑ氏旧蔵<sup>8</sup>。所収曲は表紙に記された六曲であ  
る。各曲の曲名の前後に人名が付記されている（写真3参照）ことから、  
その曲毎の演者を記したものと推測され、上演の際の台本であった可能性  
が高い。各曲に付記された人名は以下の通りである。なお「朝日奈」には  
人名の記載はない。

「膏葉煉」 弁蔵 友吉

「御冷」 利七 甚内

「船ふな」 市太郎 友吉

「鳶磔」 甚内 弁蔵 利七

「長刀応答」 太郎 庄九郎 其外七人

この記載された人名に関して、馬瀬狂言の上演資料（『狂言番組扣』など）  
で調べると、以下の通りの出演回数が確認された。

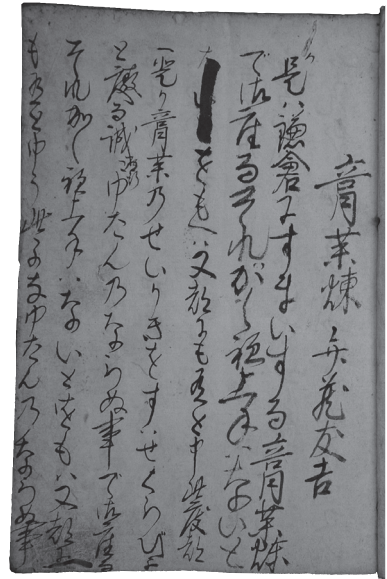


写真3 馬瀬中北本「膏葉煉」

利七<sup>9</sup> 二八回（弘化三年～明治三年）

甚内 二回（安政五年）

市太郎 三七回（嘉永六年～明治三〇年）

庄九郎 三回（天保一三年・弘化四年・嘉永元年）

弁蔵・友吉 ナシ

各人の活動状況から見ると、天保一三年（一八四二）～明治三〇年（一八九七）と五〇年程の開きがあるが、出演記録の少ない人物の記録が嘉永前後であることから、この台本を使つての上演は一八五〇年前後であつた可能性が指摘できるであろうか。

## （2）曲の展開

先述の通り、現行の馬瀬狂言「鳶磔」はこの馬瀬中北本に共通している。馬瀬狂言の現行の形を知ることのできる資料として『馬瀬狂言集』（馬瀬狂言保存会・一九九五 原文引用では「現」と略す）があり、その中に「鳶磔」も収められている。馬瀬中北本の詞章と比較すると、細部に異なる箇所

【翻刻】の校異参照<sup>10</sup>もあるが、ほぼ共通したものと見做してよいだろう。一例として、射手の道行の台詞では、

中 「誠によになぐさみわをふけれ共、鳥をねろふて遊程、をもしろいものハない。

現 大名「誠に手になぐさみは多けれど鳥をねろうて遊ぶ程面白いものはない

と、傍線部の通り異なる箇所も認められるが、それ以外は共通している。

更にこの馬瀬中北本の展開は、表1の●印の数（31）が○印（18）よりも多いように、馬瀬文化二年本よりも和泉流山脇派の諸本との共通項目が多く、中でも狂言大全集の展開、詞章と共通するところが多いと判断できる。先述の馬瀬文化二年本に認められた独自の展開は、「勝負」という表現以外は引き継がれていない。また詞章の面でも射手の無理な要求を拒否する通行人に対して、

中 大「をのれ其つれをゆうと、めに物見するぞよ。

現 「おのれ其のつれを言ふと目に物を見するぞよ

全 「己れその連を言ふと目に物を見するぞよ。

文 「おのれおくさすハ目に物を見する。

明 「おのれおくさすは目に物を見するぞよ。

馬瀬中北本、馬瀬狂言集、狂言大全集は共通した台詞であるが、和泉流山脇派の諸本では、明和中根本に代表される通り、僅かながらだが表現が異なる。このように、馬瀬中北本では、狂言大全集と共通する詞章が散見される。但し、展開の面で、狂言大全集とは異なる場面が一箇所ある。諸本の違いが明確になる場面7の、仲裁人が説得する順序が通行人、射手の順

で、明和中根本・古典文庫本と共通し、狂言大全集とは異なる。ただ説得の順序は違うものの、詞章は共通しているところが多い。その例として、馬瀬中北本では通行人への説得、狂言大全集では射手への説得の場面を掲げると、

中 「前略」いやの、是でハすまぬ。しよぶにさせられい。「ひて勝負になにをする。「されば其鴈の本の所へをいてあの人にいさせて見て、あたつたらハあの人にやらしませ。」

全 「是ではすまぬ。勝負にさせられ。「シテ勝負には何をする。「あの鴈の元の所に置いてこなたにいさせて見て、当つたらはこなたのにさせらりやうず、もしあたらずは、あの者にやらしませい。」

また、仲裁人の言葉に対して、通行人が反論する場面では、

中 「いやこゝな人か、荳反礫で打とめた鴈のあたらんとゆう事ハ御座らん。  
全 「イヤ爰な人がいつたん打留た鴈のあたらぬといふ事はござらぬ。」

と、説得の相手が異なるものの、詞章は近似したものと言えるだろう。

このように馬瀬中北本の展開・詞章は、馬瀬文化二年本よりも狂言大全集に近く、その形が現行の形へと引き継がれている。これまでの調査により、狂言大全集の所収曲の中には「狸腹鼓」をはじめ、馬瀬狂言と近い関係にある曲があることをいくつか指摘してきたが、馬瀬中北本「鴈礫」もその一例と考えてよいのだろう。

### (3) 他の馬瀬中北本所収曲の傾向

馬瀬中北本の所収曲で、現行の馬瀬狂言集にあるものは、「朝日奈」と

「膏薬煉」である。両曲共に馬瀬中北本と現行の形がほぼ一致しており、「鴈礫」と同様の傾向を示している。それぞれ曲の冒頭部を例として掲げる。

#### 「朝日奈」

中 是ハ地獄のあるじ円魔大をです。今ハ人げんかかしこふなつて八州九州に宗しをわけ、ほふけしうしやとゆうては極らくへぞろり、じうどしうじやとゆうてハ獄らくへぞろりぞろりくゝとぞゞめくによつて地獄のかし持の外じや。

現 是れは地獄の主炎魔大王です。今は人間が賢かうなつて八州九州に宗旨を分け法華宗じゃといふては極楽へぞろり浄土宗じゃといふては極楽へぞろりぞろりとぞゞめくによつて地獄の餓死以ての外じや

#### 「膏薬煉」

中 是は鎌倉にすまいする膏薬煉で御座る。それがし程上手ハないとをもへハ又都にも有と申。此度都へ登り膏薬のせいきをすハせくらびよと存る。

誠ニゆたんのならぬ事でござる。

現 是は鎌倉に住いする膏薬煉でござる。某し程上手はないと思へば又都にもあるとゆう。此度都へ上り膏薬の精力をすわせくらびようと存ずる。誠にゆだんのならぬ事でござる。

このように、いずれの所収曲も現行の形と共通していることから、馬瀬中北本は現行の詞章に繋がる資料と考えてよいだろう。また狂言大全集との関係については、両曲共に共通する特徴的な詞章が認められた。そのため何らかの影響関係があったことは推測される。但し、馬瀬狂言集の他の所収曲では、後述の通り三宅派（狂言集成）の詞章が用いられた例も認められた。このような状況から、狂言大全集との関係については、更に調査

を進め、その全体像を捉えていく。

## 結びにかえて

馬瀬狂言の中には、よく知られた中央の流儀の曲を演じるだけでなく、稀曲の上演や曲の一部に独自に工夫した展開や演出があることを指摘してきたが、この馬瀬文化二年本「鴈磔」もその一つであった。本曲は、類曲「鶯」を取り入れた独自の展開を有するもので、これまで指摘した馬瀬狂言の姿勢に通じるものと言えよう。ただその独自の形は継承されず、一般的「鴈磔」の展開となる馬瀬中北本の詞章が現代に伝えられることとなった。馬瀬文化二年本の詞章が残らなかった理由を現段階で明らかにし得ないが、馬瀬中北本の成立が嘉永前後と想定すると、仙助座から「狸腹鼓」などの曲の伝受があった時期と重なり、馬瀬狂言の芸の伝承に何らかの変化が生じ、その中で現行の形に改められた可能性が考えられる。また、類曲の「鶯」が馬瀬で上演されていた状況を鑑みると、「鶯」との差別化が図られたとも推測される。

それでは、馬瀬文化二年本の詞章は現代に伝承されなかったのだろうか。馬瀬文化二年本所収曲の中で現行の形が確認できるのは、「鴈磔」以外に「佐渡狐」と「飛越」がある。馬瀬文化二年本全体についての報告は別稿に譲るが、それぞれの詞章を確認すると、「飛越」の前半の詞章はほぼ狂言集成の詞章に一致し、後半の相撲に関わる語りの箇所は馬瀬文化二年本と共通する。一方、「佐渡狐」に関しては、全くの一致とはならないが、馬瀬文化二年本の詞章に近似していることが認められた。

このように、馬瀬文化二年本の詞章は、現代まで受け継がれたものとうでないものに分かれる。詞章が固定する時期が曲によって異なっている

と言えるが、地域の中で育まれる芸の伝承において、詞章の固定化、また改変がどのような要因によってなされるのかの解明は、中央の流儀との関わりも含め、今後の課題としたい。

馬瀬文化二年本の「鴈磔」は、馬瀬狂言の独自性とその伝承の一端を示した資料であった。

## 注

1 曲名の「鴈磔」は台本によって表記が異なるが、馬瀬文化二年本で使用されている「鴈磔」で統一した。なお、鳥のことを指す場合、論文内では「鴈」に統一し、引用本文に関しては原文通りとした。

2 馬瀬狂言保存会の所蔵番号

3 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介（1）——「狂言番組扣」を中心に——」（『学苑』696一九九八・三）、「馬瀬狂言資料の紹介（2）——台本に見える上演記録・曲名索引——」（『学苑』703一九九八・二）参照。

4 科学研究費基盤研究（C）「地方における狂言の伝承についての研究——馬瀬狂言資料を中心に——」（課題番号二四五二〇三〇二〇二二二〇一四）の研究——研究成果報告書において、馬瀬文化二年本と明和中根本の「枕物狂」の詞章が一致することについては報告したが、全体に関わる報告には至っておらず、調査は継続中である。

5 本稿で用いた台本、参考資料は次の通りである。原文の引用にあたっては、適宜句読点を付した。

明和中根本 法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵

和泉流秘書 『和泉流狂言選 愛知県立大学附属図書館蔵』（島津忠夫、野崎典子編・和泉書院・一九八〇）。

『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）

（愛知）翻刻・解題一〇一二（野崎典子・小谷成子 『愛知県立大学大学院国際



文化研究科論集』二(二〇〇一・三)、『愛知県立大学日本文化学部論集国語

国文学科編』(二〇一一・三二)

古典文庫本『和泉流狂言集』(古典文庫・一九五三・一九六二)

狂言集成 『狂言集成』野々村戒三、安藤常次郎共編・能楽書林・一九七四)

狂言大全集 国立国会図書館蔵『祖家秘書狂言大全集』

古川八十番本 法政大学能楽研究所古川文庫蔵『和泉流八十番狂言本』

和泉流狂言大成 『和泉流狂言大成』山脇和泉著・大正六年・江島伊兵衛刊)

6 拙稿「馬瀬狂言における中央と地方」(『昭和女子大学文化史研究』12 二〇〇九・三)

拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(4)——「こんくわい」について——」(『学苑』

7 751 二〇〇三・三二)

8 裏表紙の「中北梅雄」は旧蔵者中北小すゑ氏の御夫君である。

9 「理七」も同じ人物と考えると三四回となる。

10 詳細に確認すると、「そなたか」と「そなたの」といった助詞の違いから「きはめさしませ」「決めさしませ」といった語の違いまであるが、内容に関わ

るものは少ない。上記の「きはめさしませ」は、狂言大全集にも認められ

る特徴的な表現であったが、現行の詞章では、現代に通じやすい表現とな

っている。校異全体の中では、該当する詞章がない箇所(ナシ)が現行の

詞章に多く認められることから、現行本は馬瀬中北本よりも簡略化の傾向

にあると言える。

11 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介(3)——「琵琶簪」・「狸腹鼓」を中心に——」(『学

苑』739 二〇〇一・一一)

## 【翻刻】

### 〈凡例〉

一、この本文は、馬瀬文化二年本(『狂言六義』中屋豊和氏旧蔵(所蔵番号 中屋豊和七ノ三))と馬瀬中北本(『膏藥煉』中北小すゑ氏旧蔵(所蔵番号 中北小すゑ一一))を翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、原則として現在通行の字体を用い、適宜句読点を付した(当て字・反復記号「ヽ」「ヾ」「／」は底本のままとした)。また、見せ消ちの箇所は、補筆訂正された語句を採用した。

一、仮名遣いについては、底本の通りとした。清濁、振り仮名も底本のままである。一、セリフの初めの＼の記号は「に統一した」の記載がない場合は、適宜( )で補って示した。馬瀬中北本はセリフの切れ目を役名、または○印で示して

いるが、役名はそのまま記し、○印は「に統一した」。

一、底本における誤脱と判断される不審箇所には「ママ」を付した。

一、馬瀬中北本と『馬瀬狂言集』との校異を、翻刻の最後に次の形で示した。

〈中〉馬瀬中北本…〈現〉『馬瀬狂言集』

紙数の都合で、仮名遣い・表記・清濁の違いは示さなかった。

### 馬瀬文化二年本「馬磔」

○かくれもない射てゝす。此中ハ何方へもゆかぬ。今日ハ野へ出て鳥をねろふてあそほうとそんなる。誠に世になくさみハお、けれとも、鳥をねろふ遊ぶ程おもしろいものハない。今日ハ何でも物数を仕ふと存る。イヤ何かとゆふ内に野へ来た。何そありそふな物しやか。イヤあれに鷹か居りてゐる。さらばねらわふ。

拵ヲスルあたれはよいか。さい「なふくいそかしやく。奉公人ほといそかしひものわなない。何時ともなふ御使にゆかねはならぬ事しや。イヤあれによい鷹かおりにいる。あれをつふて打ふ。あたれはよいかくいやゑい、のふく嬉しやく。まんまとあたつた。急て取て行ふ。「やあ是く。何て御座る。(一)それハそれかし射た鷹しや。こちへおくせ。「いや爰な人か。是ハそれかしかつて打た鷹しや。やる事ハならぬ。「いや爰な者か。それかし射た鷹を其様な事かあるものか。「左右あらは矢跡か有そふなものしや。矢の跡か有か見させられい。「矢のあとハのふても、某かしつとねらいころしたのしや。やる」(31オ)事ハならぬ。「何の鷹かねらい殺さる物しや。無理な事を云人しや。やる事ハならぬ。「ていと云か。「ていと云か何とする。「おのれおくさすハ目に物を見する。「夫ハたれか。「某か。笑「夫ハ嘸おそろしからふそ。「足例にくいやつ。「ア、誰もないか出合く。「何事しやく。まつまさせられい。「待とハ何と。(一)是ハ何とした事で御座る。「扱くにくいやつ。某か射た鷹を取て行によつて、おくせと云ハおくさぬ。そこをのけ。壹矢に射てのくる。「先待せられい。それかし居るからハ、れうしハさせぬ。おくせならはおくせと云ませふ。「はようおくせと云へ。「なふく今の聞たか。「いかにも聞きました。扱く無理な事を云ます。是ハ某かつて、打た鷹で御座る。射とめた鷹ならは、矢の跡か有そふなもので御座る。矢の跡か有か見させられい。やる事ハならぬと云て下され。「是ハ尤しや。なふくあれハあの者かつて、打たと申。こなたの射とめさせられたらは、矢の跡か有そふなもので御さるか、矢の跡ハ御座らぬ。やる事ハならぬと云」(31ウ)ます。矢の跡ハない筈しや。「何とした事で御座る。「某しつとねらい殺したのしや。「笑鷹か其様にねらい殺さるゝものてハ御座らぬ。夫ハこなたの無理で御さる。何とした物てあるふそ。夫は是てハ埒か明ぬ。勝負をさせられい。「夫ハ何とする。「何成共かけ物をして、今壹度あの鷹を射て射とめたらは取て帰らせられい。あたらずハかけた物をあの者にやらせられい。「左右あらは何をかけふ。「何かよからふそ。「此壹腰をかけふ。「一段とよふ御座る

ふ。其通云ませふ。「早ふ云へ。「なふく是てハ埒か明ぬによつて勝負をおしやれ。「夫ハ何としまするそ。「あの人の壹腰をかけ物にして、其鷹を今壹度射させてあたつたらは鷹をやらふず。あたらずハ刀をとつて御かへりやれ。「是ハなりますまい。「何とした事しや。「生ていぬ鳥かあたらいて成ませふか。是ハなりますまい。「いやく最前から見るに、あまり上手てハなささふな。ひらに勝負にさしませ。「さうあらは御覧申まする。「とれく鷹をおくさしませ。(一)心得ました。「さあく刀をおくさしませ。「心得た。「かまへて矢ハ壹本射さ」(32オ)しませ。「五拾本計射よふ。「其様に射る中にハまくれ当りにもあたる。それハならぬ。「左右あらは拾本計ハ何とあらふ。(一)いかなく壹本より外ハならぬ。「是非に及ぬ。壹本射よふ。「サアく射さしませ。「もそつと近くにおけ。「イヤくあの儘射さしませ。「さふあらは射よふ。「ヤア是く其様に近く寄しまするな。「早ふ射させられい。(一)扱く其様云と射られぬ。「近くへよるものを云いてならふか。「是く又よらせらるゝ。夫から射さしませ。「早ふ御いやれ。「扱くやかましい云事しや。「いやゑい。「二人笑 なふくあたりハせぬ。嬉しやく。「是く今壹本いさせてくれい。「もはやならぬ。「そこか頼むと云物しや。ひらに射させておくりやれ。さい人「こなたの手なみ知れた。も一度射さしてやるふか。今度ハ何をかけさせらるゝそ。大「此小袖上下をかけふ。アト「かまへて矢ハ壹本ておりやる」(32ウ)大「心得た。「是く夫から射さしませ。「またねろふて居にやかましい言「近ふするものをいわいてならふか。「さアく早ふをいやれ。「いやゑい。「なふく嬉しやく。先急て行ふ。「早ふゆかしませ。「やア是く。「何しや。「其鳥ハやらふ程に羽根をくれい。「夫ハ何にする。(一)茶はきの羽根に仕たい。(一)成ぬそく。(一)扱くとふよくな。たつた壹まいくれいいい。

大名 如常 弓矢持 下ニ袴着ル

アト く、り袴小サ刀

さい人 長上下

鴈 大鳥ノ羽根か勝手掃のほうきか」(33オ)

※さい：仲裁人を指すものであるが、ここは奉公人の誤り。

### 馬瀬中北本「鴈磔」

甚内 鴈磔 弁蔵／利七

大名「大いんです。此中ハ何方へもいかぬ。きよはのゑ出、鳥をねろふて遊ばと  
存る。誠ニよになぐさみわをふけれ共、鳥をねろふて遊程、をもしろいものはない  
いや何かとゆう内のへきた。はあ何ぞをりそふなものじやか。」「のふ／＼いそ  
しや／＼。大名「いやあれにみごとながんかをりてゐる。」「きうようあつて山一  
つあなたゑをつかに参」(20オ) 大名「(一)さらバ身ごしらいをしていとう。」「先  
いそいて参らう。はああれに大きながんかをりてゐる。さらばつぶてをうつてみよ。  
あたれハよいか。いやあ、ゑい。大名「たつた今迄あれニいたかんの、草にふし  
たか。」「のふ／＼うれしや。まんまとあたつた。先いそいて行こ。大名「やい／＼  
其がんのどれゑ持て行。」「これハ今、それかしつふてで打とめたがんじやによつ  
て持て行まする。大名「さて／＼にくいやつ。それは身共かいとめたかんじや。  
やる事ハならぬ。をいて」(20ウ) ゆけ。」「(一)さて／＼むりな事をいう人じや。  
大「をのれ其つれをゆうと、めに物みするぞよ。」「そりやたれか。」「(一)身共か。  
」「わらう。」「なにかをかしい。」「こなたか目に物をみせたらバさそこわこわかろふ  
ぞ。名「ていとゆうか。」「ていとゆうたらなんとする。」「さて／＼にくいやつ。  
」「はあこれハなんとする。大「をのれに物をゆわせてをくによつてじや。た／＼一  
矢にいぬいてくりよ。」「ああたれ」(21オ)も無か、出やい／＼。」「なに事しや、  
なに事しや、／＼。これ先なに事しや。」「ああとめて被下。大「(一)先のしもき  
いて御くりや。それかしのいとめたがんの持て行によつてじや。そこを／＼のきやれ  
しよふ有。」「とめて被下／＼。」「それかしかいからハ、りよじハさせぬ。よいよ

をにい／＼つけておませしよ。大「はよふおいてゆけとをしやれ。」「心得た。いや  
の。あの人のおとめたがん」(21ウ)のなぜ持てゆかします。」「こなたもきいてを  
くりや。是ハそれがしか今つふて打とめたがんじやによつて持て行まする。  
」「すれハそなたかいとめたがんか。」「中／＼。其通いふ。いや、あれハあのもの  
かいとめたがんじやという。」「さて／＼にくいやつ。あれハ身共かいとめたか  
んじや。やる事ハならぬ。をいて行けとをしやれ。」「心得た。いや、それハ身  
共かいとめたがんしや、をいて行けという。」「さて／＼むりな事を」(22オ) ゆう  
人じや。又あの人のおとめたがんならバ、やのあとか有そふなものじやか、みさ  
せられ、やのあとハ御座らんぞや。」「どれ／＼、誠ニ矢のあとか無。其通ゆふ。  
いや、こなたのおとめたがんならバ、矢のあとか有りそふなものしやか、矢  
のあとハ御座らんぞや。」「身共かいとめたやうにこそ。」「いとめでなんとさ  
せられた。」「ゆみてじいのねらいころいたいやい。二人「わらう。」「中／＼あ  
のね」(22ウ) らいころさるゝことハおりにない。」「とかくをのしでハらちいかぬ。  
そこにをのきやれ。しよ有。」「とめて被下／＼。」「それかしかいるからりよ  
じハさせぬ。よいよふにい／＼つけてをま小。」「はよふもとせとをしやれ。」「得心た。  
いや、是でハすまぬ。しよふにさせられい。」「ひて勝負になにをする。」「され  
バ其鴈の本の所へをいてあの人にいさせて見て、あたつたらハあの人にやらしま  
せ。」「いや／＼な人か、壹反磔で打とめ」(23オ) た鴈のあたらんとゆう事ハ御座  
らん。」「いや／＼きづかいをしやるな。いこふへたそふな。平に是にきハめさし  
ませ。」「そふあらハ共かくもしま小。」「ざんとすんだ。いや、是でハすまぬ。  
勝負にさせられい。」「ひて勝負になにをする。」「されハあ鴈の本所へをいてこ  
なたにいさせて見てあたつたらバこなたのにさせられい。」「いや／＼なもの(一)  
か。一つたんにとめた鴈のあたらんとゆう事ハあろふか。」「でも」(23ウ) 是をい  
させらねハ、こなたのまけて御座る。」「何しや。身共かまけしやとゆうか。」「中／＼。  
」「ぜひにをよばぬ。本の所へをけとをしやれ。」「心得た。いや、元所へをかしま  
せ。」「心得た。さあ／＼、はよふいさせられい。大「またこしらいらひてゐるハ

いやい。「いやの、それかしハよふしあつて山壺つあなたゑ御使に行かねハならぬ。はよういさせられいとゆうて被下。「心得た。いやの、あの人ハようしあつて山壺つあなたへ御使に行かねハならぬ。はようい」(24オ)させられいとゆう。「扱ゝせハしい。まだこしらゐをしてゐるわいいい。「さあゝはよふいさせられ。いてみ小う。<sup>50</sup>をふやいゝ、あれハさい前のとハをき所かちかう。「本所<sup>52</sup>で御座る。大「もそつとこちゑよせてくれんか。「いやゝ勝負の事なれハ、其よな事はなりませぬ。さあゝはよういさせられい。大「いてみ小う。<sup>54</sup>「やあ是ゝ本所からいさせられい。「またねろてゐるハいいい。「さあゝいさせられい。いてみしよ。<sup>55</sup>「いや。是ゝ」(24ウ)本所からいさせられい。「またねろてゐるわいいい。「さあゝはよういさせられい。「ぜひにをよはぬ。いてみ小う。<sup>56</sup>二人「見物致そ。大「いやあゑい、はああたらんなんだ。二人「わらう。<sup>57</sup>いかいへたしや。「のふゝ。うれしやゝ。先いそいてゆこふ。「やいゝ鷹かほしくばやろふ。<sup>58</sup>其をそゑハをまいくれいや。(一)やろふか、やろふか。何にをしやる。<sup>59</sup>「茶はきはねにしたいわいや。「いかなゝならんそゝ。大「あゝどふよくな、<sup>60</sup>たつた<sup>61</sup>壺まいくれいわい。」(25オ)

# 《校異》

1. 〈中〉きよは…〈現〉今日
2. 〈中〉遊ぼと…〈現〉遊ぼう
3. 〈中〉よになぐさみ…〈現〉手なぐさみ
4. 〈中〉をふけれ共…〈現〉多けれど
5. 〈中〉はあ…〈現〉ナシ
6. 〈中〉きうよう…〈現〉今日用
7. 〈中〉はあ…〈現〉はて
8. 〈中〉それかし…〈現〉某しが
9. 〈中〉物…〈現〉物を

10. 〈中〉わらう…〈現〉ハハア…(笑う)
11. 〈中〉みせたらバ…〈現〉みせたれば
12. 〈中〉さてゝにくだいやつ。」「はあこれはなんとする…〈現〉ナシ
13. 〈中〉ああたれも無か…〈現〉はあー誰もいないか
14. 〈中〉をのし…〈現〉おぬし
15. 〈中〉きいて御くりや…〈現〉きいておくりやれ
16. 〈中〉がんの…〈現〉がんに
17. 〈中〉そこを…〈現〉そこ
18. 〈中〉しよふ有…〈現〉勝負致す
19. 〈中〉いからハ…〈現〉いるからは
20. 〈中〉はよふ…〈現〉おゝのふ
21. 〈中〉がんの…〈現〉がんに
22. 〈中〉こなた…〈現〉此の方
23. 〈中〉きいてをくりや…〈現〉聞いておくりやれ
24. 〈中〉今…〈現〉ナシ
25. 〈中〉そなたか…〈現〉そなたの
26. 〈中〉身共ハ…〈現〉身共が
27. 〈中〉あとか…〈現〉あとは
28. 〈中〉其通ゆふ…〈現〉ナシ
29. 〈中〉ものしやか…〈現〉ものじゃ
30. 〈中〉ナシ「みさせられ」を見せ消ち)…〈現〉見させられ
31. 〈中〉じいの…〈現〉ねらいの
32. 〈中〉とかく…〈現〉とにかく
33. 〈中〉をのし…〈現〉おぬし
34. 〈中〉そこに…〈現〉其の事を
35. 〈中〉しよふ有…〈現〉勝負致す



36. 〈中〉から…〈現〉限り  
 37. 〈中〉ひて…〈現〉して  
 38. 〈中〉あの人に…〈現〉あの人に  
 39. 〈中〉きはめさしませ…〈現〉決めさしませ  
 40. 〈中〉しま小う…〈現〉しまふう  
 41. 〈中〉是では…〈現〉是で  
 42. 〈中〉こなたに…こなた〈現〉  
 43. 〈中〉あたつたらバ…〈現〉あたつたならば  
 44. 〈中〉事ハ…〈現〉事が  
 45. 〈中〉いさせらねハ…〈現〉いさせられねは  
 46. 〈中〉身共カ…〈現〉身共の  
 47. 〈中〉をけとをしやれ…〈現〉置かしませ  
 48. 〈中〉いやの、元所へをかしませ。「心得た…〈現〉ナシ  
 49. 〈中〉こしらいらひて…〈現〉こしらへて  
 50. 〈中〉いてみ小う…〈現〉いてみよう  
 51. 〈中〉をふ…〈現〉ナシ  
 52. 〈中〉本所…〈現〉もつと前  
 53. 〈中〉こち…〈現〉こちら  
 54. 〈中〉いてみ小う…〈現〉いてみよう  
 55. 〈中〉いてみしよ…〈現〉いてみよう  
 56. 〈中〉いてみ小う…〈現〉いてみよう  
 57. 〈中〉わらう…〈現〉ハハハ…（と笑ふ）  
 58. 〈中〉鳳か…〈現〉鳳の  
 59. 〈中〉をしやる…〈現〉しゃる  
 60. 〈中〉ナシ…〈現〉奴だ  
 61. 〈中〉たつた…〈現〉ナシ

〈付記〉

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧のご許可、並びにご高配を賜りました馬瀬狂言保存会会長河原良治氏をはじめ、会員の方々に改めて感謝申し上げます。また資料調査にご高配を賜りました法政大学能楽研究所に感謝申し上げます。

（やまもと あきこ 日本語日本文学科）